

## 仏教葬送事物の発展比較考 (四)

和田 謙 寿

### 一

日本で納棺をするに当り棺を購入する場合儀式めいた事はなにも行われていないようであるが、中国では接棺と言って棺を迎える儀式が行われていた。棺を担ぐ人たちの人員数も偶数からなり、通常六名か八名、棺の良質のもので重いものの場合には十六名からの者が参加して行われたのである。斯かる風習は現在でも台湾の一部において今尚行われている（昔日この種の仕事は中国などにおいては苦力によって行われていたのである。）棺を迎える場合家族の人たちは家を出て街頭に赴き徐に迎えたのである。棺を荷負った行列が家のそばに来ると一同の者は膝まづいて号泣しながら寄添ったのである。棺を買いに行く事を「買棺柴」と呼ばれているが、昔日の我国で葬儀の言葉を嫌って「勝事」などの語を用いられた如く、当地にても「買棺柴」の語を避けて「買大厝」―大きな

家を買う―とか、「放板仔」―板を買う―などの言葉を多く用いている。棺を買いに行くと言ってもその国々によってそれぞれ仕来りがあるようで、中国では一般に母方の外戚の力が強かったので、母の死亡した場合には母方の実家の指揮を受ける事になっていた。つまり、「接外祖」と言って、外戚の人たちの来るのを待って儀式を行い、そののち棺の選定を聞き外戚の人たちと共に棺を求めに行くのが通例であった。棺を買い求めて帰宅する場合、その途中橋や十字路を経過するときには銀紙や紅布一条を置くならわしがあったと言うが、これを「放紙」と呼んでいる。台北より花蓮に行く途中の峠の屈曲路において銀紙の散かれている様子を見かけた事があるけれども、これらの習俗はいずれも土地に付着する魔物を退散させるための呪術らしい。高雄近郊の広東部落の葬送行列の際にも同様に銀紙の撒かれているのが観察された。我が国の葬送行列の際、曲り角や辻々において太鼓や鏡

鉞などの仏樂器を打ち鮮らし、魔物の退散を願ったのも前者に類似する行為として考えられる。

棺を買い求めて門前にさしかかると、喪主をはじめ遺族の人たちは全員喪服を身につけて門前に跪き、棺を家に迎え入れることになる。現在でも台湾の田舎では嚴肅なものとにこのような儀礼が今尚行われている。棺が葬家に届けられるとき、同時に死者には衣服を着用させる運となる。これが経帷子(2) かつらひらの試着式、つまり「套衫」である。これは死者に着用させるところの着物数枚を先ず喪主が着用し、そのうちその衣服を死者に着用させるところの儀式である。「套衫」の枚数は普通五重か七重であり多い場合には十一重のときもあると言われる。不幸にして若くして死亡した場合は「夭寿」と言い三重の場合もある。元來、その着衣の数は喪衣であるから奇数を常とし偶数であってはならぬ。尚その他に男性には褲二枚、女性には裙三枚を要するとされている。時代が立つにつれて昔日よりこうした風習は簡素化され現在ではその一部を留めているに過ぎなくなってしまう。それでも台湾の各地を探訪していると時に昔の面影に接する事ができる。台北の通法寺で老住職は死者と衣類について「中国南部(広東)や台湾では死んだ人に七重・九重・十一重の衣類を着せるが五重の場合には始んど見られなかった。着替の時期は死者を納棺させる前にせられた。着物は白い着物や黒い着物でもなく、また

普段着ている着物でもなく、一定の年令になると大抵の人たちが死ぬ時に着用する着物をあらかじめ用意しているのが通例である。交通事故をはじめとした急な災害を受けての死亡はその多くが若い人であり、死をよきしていないのでその人のよそ行きの着物を着せるのが常であった。」と語ってくれた。台湾の田舎部での探訪を総合すると死者の衣服は古い家庭で七重着せるのが通例であり、それも經濟事情やその家の親族の意志によるものようである。下から襦袢、上は着物となる。最近のこのような風習は廃れつつある。人によって着物の場合と洋服の場合とがある。一番外側の衣類は長く足元まであるのが通例である。前に「套衫」の枚数を五重か七重と述べたが、ところによっては五重の数を極度に嫌う地方も存在する。現に台湾での探訪の際、五重の枚数の存在しなかった事が如何にも印象づけられたからである。この件について、デ・ホロートは中国宗教制度の書中において次の如く述べている。『衣裳の数も大きな関心の対象である。裏付の衣裳は一枚とも二枚とも数えられるが、衣裳五枚は断然排斥される。何となれば「五」と言う語は「誤」に通じ、これは「知らずして他の人々に災害を及ぼす」の意があるからである。廈門人は「誤父、誤母、誤婦、誤団」と言うが「父、母、妻、子が不幸に見舞はれる」の意である。五重ね又は五枚の衣裳を着せて死者を葬ると、死者はこのような運命を子

孫にもたらさざるを得ない。従つて、体面を重んずる家族がそれ以下に断じて減らす事のない衣裳の最低枚数、即ち体に触れる襦袢一枚、普通の襦袢二枚、長衫一枚、馬褂一枚、祝祭用の上衣二枚で、五枚を超過した数になることは好都合な一致である。

裕福な人は裏付の衣裳を一枚と数えて、殆んど常にその数を少なくとも九枚にする。然しながら、十一枚、十三枚、或はそれ以上を用いねば恥と感ずる人も多い。常に中国の哲理では偶数を陰、即ち寒・暗・悪・女性的・その他と見、奇数を以上と正反対の良い要素と見ると云う事実から、偶数の葬衣は常に絶対に排斥せられる。陰の数で死者を包む事は、墓及び来世における彼の幸運を實際故意に毀傷する傾きがあり、彼の状態の不幸は、次には子孫に悪影響を及ぼす。その悪影響中一例を挙げれば、かかる事をすれば、未来において死者がこの世に女として生れでて、その女は女の子ばかり生むようになるであろう。男に生まれるか女に生まれるかと云う運に直面して、女に生まれると言う事は、眞の中国人は誰しも望まない所である。蓋し中国では婦人は劣等視せられ、家庭内において娘は重要視されないからである。

葬衣の数量はまた、死者の年令に左右せられ、年と共に増える。孝心ある者は死者に数多くの衣裳を着せる。と云う考え方が行われているので厦門地方の貧家の多くは、生存者が

着用したならば、数時間にして手の付けられぬ檻褌の塊となつて体にぶら下る程の、安物の材料で出来た葬衣を用いる。然し、箔を貼った紙片が高い値打の通貨として彼の世に通用するとしたならば、高価な絹の安い擬い物が、彼の世では美麗を極めた衣裳とならぬこともあるまい。死者に数多くの衣裳を着せる事は、既に周時代から確定せる慣習となつた。……』

この風俗の如何いかに古い頃からのものであつたかを知る事が出来る。日本ではこのような風習のあつた事を未だ聞かない。我が国では古来、死者には原則として白衣を着用させるのが通例であつた。時には厳格な風習の家庭では墨染のコロモを着用させたところもあつたと言われる。白衣の事は「コロモ」とよばれる地方もあり、白衣を縫う場合にはその糸は結び目をこしらえぬのが正式であるとされ、死者への着付は左前、裏返しに着用させるところが多かつた。ときには信仰厚き人たちの間に白衣に経文を書き記したものを着用する者もあり、これを「明衣」の名で呼ばれていた。最近では白衣と共に黒装俗をするようになったが、この歴史はハッキリしない。中国においては葬送(不幸)に関連した事項を指して「白事」と呼ばれた事が一般化している。現在、北歐の国々では不幸に黒色を使用せられるのが常である。

タイ国の死者の着衣には改めて色の指定はないと言われる

いる。生前に好きだったものを着用させると言う事である。死んだ人の着物は下着を除いて一枚だけである。ただ熱帯地方と言う性格柄か多くの場合白色が利用せられる。火葬の場合には白布で遺体をぐるぐる巻にして保存される場合がある。タイでは火葬の場合、死亡後一ヶ月から六ヶ月位の期間寺院に預けてその後茶毘して埋葬に付するのである。マイレシアでは死者に純白な木綿を着用させ、頭も白木綿で包み化粧をしてやる。香料はアルコール分の無いものを用い、死者の臭みを消し、最後に大きな純白な木綿にて死者の全体を包む事になっている。東南アジア等の地方では葬送の際に、日本の如く死者の額に三角形の布を付けるような風俗（石垣地方では親戚の人や子供たちは頭に三角の布を被る。死亡した本人よりも送る人の方が用いるのである。昔は女性の人のみフロシキを三角形に折って裏返しにしてつけたのであり、男性は黒の喪章をつけたと言う。日本本土においても、中部地方や東北地方において死者のみではなく、送り側の方も額に三角布をつけて葬式に参加する地方が見うけられる。三角布は地方によって紙鳥帽子・シッポウ・ツノ帽子・ヒタイアテなどの名称で呼ばれている）は無いが、それに類似した行為をする地方は時に見かけられる。それは葬礼時における鉢巻の習慣である。

中国やインドネシアなどでも死者の頭に鉢巻をする場合と、葬列に参加する人たちが鉢巻をして参加する場合とがあ

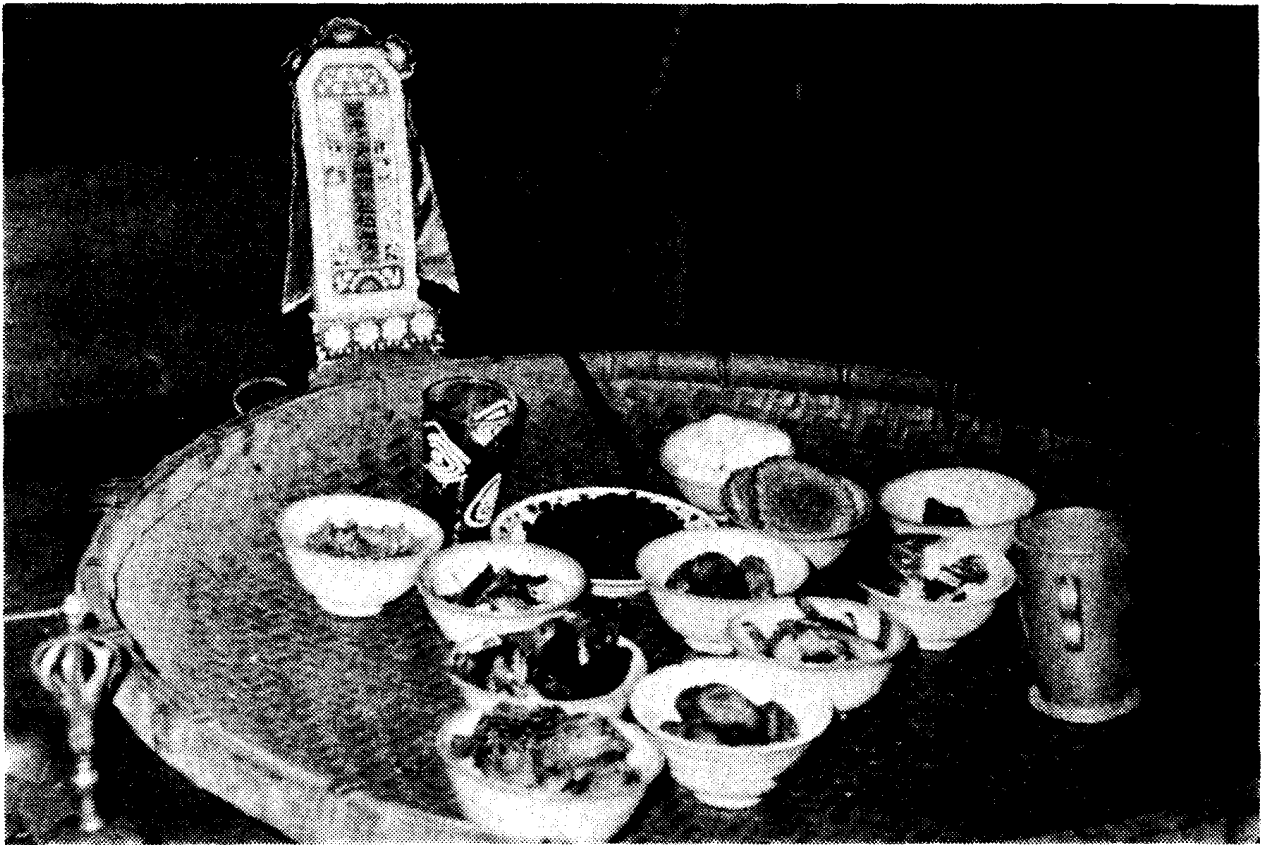
る。または台湾の如く、死者の男子には帽子を被せ、女子には刺繍をした鉢巻をさせるところもある。男子の帽子は支那服の場合はチャイナ帽、洋服の場合はウールの帽子となる。息子や嫁は任務が重いので特別な服装をする。

## 二

長寿は人間の誰しも乞い願うところのものである。葬送の儀式の中にはこれに関連するところの行事が行われるのは当然と言えよう。「抽寿」とはその意を受けたところの言葉である。套衫の終わりにソーメンに黒砂糖を混ぜて煮たものを食べることで、喪主が一番はじめに食べ、これに続いて家族のものが食べる。黒砂糖、つまり甘味のある砂糖の類は吉日に用いるものであり、凶事を変じて吉日にすると言う意のもとに喪事を打ち消すものであり、ソーメンは長く伸びるので寿命を延ばす縁起よきものと考えている。（結婚式の際にもソーメンを食べる風習があるも、これも場合こそ異なれば、夫婦間の永続（長くのびること）を願ったところの習俗である）

やがて納棺を前にして死者に対して最後の御馳走を供養するところの儀式が行はれる。これを「辞生」または「告別食」とも呼ばれている。これは「十二碗の料理」からなり、六碗は醒・六碗は精進料理よりなるものとせられている。古来中国では菜碗とか菜飯と言う食物に関する習俗があったらし

く、菜碗は十二種からなるところの精進料理で釈尊や觀世音、彌勒菩薩などの仏に供える場合のものであり、菜飯は十二種以上からなる料理と飯からなり、祖先の霊や孤魂などに供えられるものであった。この種の料理は結婚式のときに行われる「食酒婚卓」の十二種の場合とよく似ている。斯かる風習は現在、台北や台中の近在でも葬送や法要の習俗の際に見かけることができる。もともとこれらの起原は中国では古来より行われていたものらしく、周礼卷四中の「君主は一日一回は正式の食事をするが、これは壺十二箇で供されている。」との慣習からであると記されている。この事につき龔天民氏も中国杭州付近の葬送習の中に、「家族の人々はもう死体の復活が不可能とわかったとき、死者に色々な食物を与え、お別れの食事をする。死者に与える食物は金持か官吏であるならば十二皿もある……」と述べられているので、中国の南部にも斯かる風習がつい最近まで存在していた事を知ることが出来る。当地では周囲の人たちの縁起のよい言葉と共に、食物を箸に狭んで一碗ずつ死者に食べさせる形をとる風習がある。台中や台南の地方でも死者やホトケに食物を供える場合、「この食物は新鮮でとてもおいしいから、お召し上がり下さい。」などと故人に声をかけてから与える風習が残っているから、つい最近までこのような風習が広く行われていたと考えられる。ネパールの首都カトマンズの目玉寺へ



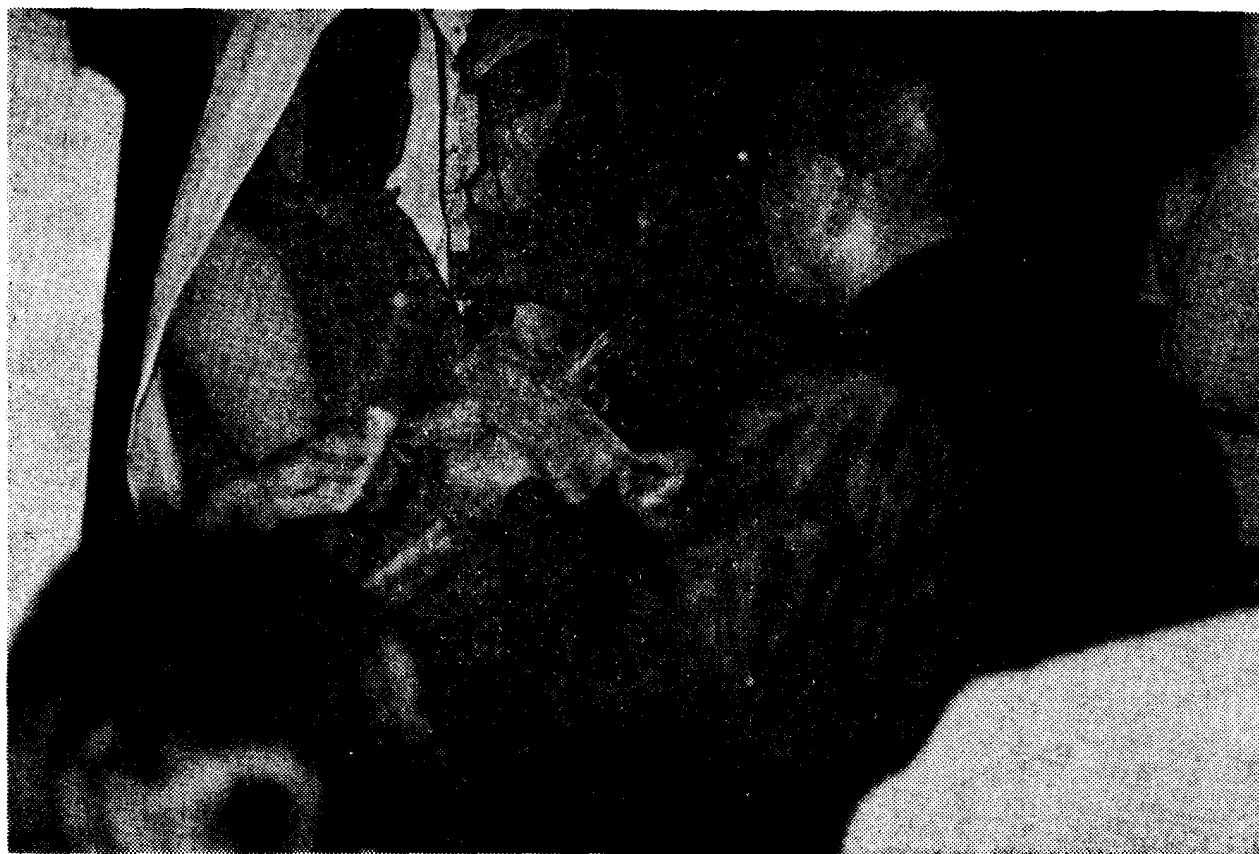
台北近在の葬式に供えられた十二種の料理

上山した際、その仏前にも食物を供養する皿の中へ十二種の供物が捧げられているのが目についたが、中国のそれに何か関連性があるものと思ひ興味を引いた。デ・ホロートによれば、十二種の材料は、一、鴨の丸焼、二、鶏の丸焼、三、鹿の乾肉若干、四、魚一尾、またはそれ以上、五、荳棗、六、麻棗、七、紅丸(円形の菓子)、八、鮑あわびの肉の乾したもの(旺螺)、丸、鳳梨、十、麻粩(麻の実の菓子を死者の年の数だけ供える)などからつくられたものようである。このような材料のうち、一から四までは中国的な立場から見ても当然なもののように考えられるが、五から十までのものの中には少々理解に苦しむようなものが存在する。よくよく考えてみると、理解に苦しむどころか、中国人らしい発想が、かえって湧いて来るのに気が付いた。つまり、語呂合わせ的な面より生じたところの意義のある食物であると言うことである。荳棗と麻棗の食物名の棗が大きな意義を含んでいると云うのである。棗は「来」の字を重ねたものであり、その美味を以って死霊を家に呼び戻すと共に、「重来」、つまり、死者の再び舞戻することを望み願ったところの意のもとに供えられた食物であると言われている。八、の鮑の乾肉の別称、旺螺は、旺(繁昌)及び麗(富裕)と同音であるので、九、の鳳梨パインアップルは「旺梨」とも呼ばれ繁栄の梨の意味を持ち、それぞれの縁起と語呂の良さより利用せられている事がわかる。我が国の長

野や山梨県の山間部においても、納棺の際に、棺の中へ糠やクルミ・サンショなどの品物を入れ、十、「またもこの世へ来るみでまたんしょ」などと、死者の再来を願った語呂合わせの習俗が行われたが、これらも前者中国の場合と相通するものとして興味をもたれる。いずれかと言え、日本の供養を施す第一の根本的意義は、死者の冥福、死者への敬慕の念を中心として行われるが、中国の場合は死者を祀ることによって子孫の繁栄、子孫の幸福を願うものとして考えられる場合が多い。故人をまつる事はその功德によって子孫に恵みを授かる事が出来ると信じていたのである。この一環の習俗として葬送儀礼にまつわる遺産金を子孫に渡し与えるところの習わしがあり、これを「放手尾銭」と呼んでいる。これは字の如く、納棺の前に死者の袖口に金銭を入れ、その金銭の袖を通じて落ちるところに鉢または杓を置き、その中へ落させるのである。そののち、その落させた金銭を子孫に分け、子孫(子供)たちはそれぞれその金銭を細ヒモに通して自分の手(腕)に縛り付けて置く。これは一種の形見分けであり、「結手尾銭」と言つて喪章のしるしにもなる。このような儀式をなした功德(御蔭)によって子孫たちは益々栄え、永久にその家や子孫が金持になる事ができると信じ、これを「放手尾銭・富萬年」と呼んでいるのである。私は幸いにもこの放手尾銭の習俗を台北の田舎部にて見る事が出来た。麻衣を着用



放手尾銭・結手尾銭、台北郊外での葬式の際に写す。金銭を細ヒモに通し右手の腕に縛り付ける、一種の形見分け



割鬮の儀式、(この世との縁切の儀式) 納棺の際、親族の固く持ち合う細ヒモを道士は鉋丁で切り落とす。

した人々の腕の付根の部分に細ヒモにて結ばれたコインが腕輪の如く縛られているのである。古代の風習が現在まで維持されているのは全く驚くほかはなかった。聞くところによれば台中や台南の地方でも同様な習俗が今尚行われていると言う。私は再び台北近在の葬式現状を追って歩いた。六十七歳の男子の主人公が死亡し、大勢の人たちが集まっていた。

暗い電燈のもとで「割鬮」の儀式が行われていた。葬家の許可を得て具に見学をする機会を得た。この儀式は死者がこの世に再び帰る事を避けるための儀礼であり、同時にまた、正式に死者との別れを確認し、死者が安心してあの世の人になるため、成仏を願うための儀礼であるとも考えられる。死者の指先に一本の長い紐を結び、その一端を遺族の人たちが手に握み持ち、家から外庭にまで長々と伸び広がりて行く。道士が何か呪文を唱えながら鉋丁でそれぞれの人たちが持っている細紐(糸)を徐に切<sup>おもむろ</sup>って行く。その言葉の内容は、「無事にあの世へ行ってよい生活をするように」とか、「家の事は心配しないでよいから安らかな道を歩きなさい、」などの縁起のよい言葉を投げかけてやるのである。ここで切り取った糸は各自家に持ち帰り、庭の角で銀紙と共に焼き捨てるのである。中国や台湾、東南アジアの華僑の地域では葬送や法要、魔払いなどの行事をする場合には銀紙を焼く風俗がある。それにしても中国の人たちは霊に対して非常な程に気を

配る。その一つに「豎霊」がある。これは葬式の時や初七日、乃至、五七日・七七日・百ヶ日・一周忌・三回忌などの法要の際、紙でつくられた一对の人形が供えられる。これは召使いを意味し、故人に付添い、あの世にて色々な事に気を配り世話をしてくれるのだと言う。その他祭壇の両側には紙や木でつくられたところの、家具や電気用品をはじめとした日用品、自動車や飛行機に至るまで並べられている。あの世へ行っても故人が何不自由なく暮せるようにこのような品物を供え贈ってやるのである。いつかシンガポールの華僑の葬送に立寄った際、このような光景に接したが、実に多彩な紙製の品物が並んでいたのには驚かされた。このような品物が多く飾られれば飾られる程、葬式の威大さを示す事になり、喪主は周囲の人に対して誇を持ち満足の度を高めることになる。

### 三

日本の場合と同様、台湾においても納棺は葬送儀礼の中でとくに重要な儀礼の一つであり、これを「入殮」と呼んでいる。このような行事には中国では必ず風水師(地理師)が関与しているのが常であった。良い日に納棺や埋葬をしないと、故人の未来の吉凶に支つかえるばかりでなく、子孫の繁栄にも悪影響を及ぼす事になるのである。それ故、時には死体を



二三日以上置く必要性も生じたので、立派な棺を購入しておく必要がある。中国の人々は薬で屍体の腐敗を防ぐと言うよりも棺の丈夫なものを選ぶ事が先決だったらしい。最近都会では死後二三日のうちに埋葬してしまうところが多いようであるが、それでも古式を好む家庭では昔日にならうて行われているところもある。昔日においては、その人の階級や家柄などによって死んでから埋葬するまでの期間が定められていた。納棺の日には死者の息子たちをはじめとして、近親者たちが墓地を探しに行くのであるが、この場合も風水師(地理師)の指示によって、よりよい方角の墓地を探し求めなければならぬのである。現在、台湾でもこの風習は残されているが、進んだ考えの人たちは(革新的な人)日本の如く先祖代々の墓地所有に踏切っている者もある。(納棺や埋葬をする際、死者の年令や生年月日、死亡時の歳廻りなどによって兄弟や親族とても、そこに参加出来ぬ場合がある。近年は多少その仕来りも軽くなり、その場に居合わせてもその時だけ目を反すとか、うしろを向いてその場を見なければ良いと言う場合もある。尚、地理師はその人やその家族の運命を指配する力を有しているので、ある意味では非常に尊敬され僧侶以上の場合もある。親よりの世襲によるものもある。墓地の周辺や街角などに広告を出し居住している者が多い。)

納棺をするに当り先ず大切な事は棺質の選定である。火葬

の場合はいざ知らず、土葬の場合、死者を長く保存するためにはより良い棺材を用いなければならぬ。もともと儒教では屍を焼く事、つまり、火葬にすることを嫌ったので上流家庭においては特にその点留意せられたのである。台湾では最近火葬による埋葬も都市部においては増加しつつあるも、田舎部においては未だ土葬も行われている。火葬の場合の棺は日本の場合とそう変りはないが、土葬の場合の棺は比較にならぬほど豪華につくられている。昔、宋代には棺材としては楸(ひさぎひのき)や柏・桑などが貴ばれた。特に楸は木質が堅く、木目も美しかったので棺としてこの木を好んだ人が多かった。独傍とか独蓋と言って楸の木を用いて棺の四面を一枚の板で造られたものは非常に欲せられたのであった。

北京風俗図譜によれば、清朝北京の近在では「たつぷり五寸の厚味のある硬い杉材で作った重い棺が……」と述べられ、また、龔天民氏の「<sup>(10)</sup>中国人の葬習俗」とくに杭州を中心として」の論文中には、楠・桐・杉・柏などの樹種の使用せられたことが述べられている。特に楠は棺材として適し、木の香りは虫や雑草を退けるばかりでなく、湿気に強く棺内の屍体を守るとされ重宝がらわれていた事が述べられている。韓国においては一般には松材が多く用いられ、て上流層の間(11)においては香木、榿木(かやのき)・桐(けやき)・樺などが用いられたようである。棺の蓋は出来得るならば一枚板を用い、釘も出来得るな

らば金層のものを避け木製の釘を使用することが欲せられた。また、棺内の屍がなるべく長期に保存せられるために厚味の板を用い、更に防腐蚀の漆を何回も棺に塗るよう配慮されたのである。且つての中国や現在の台湾の場合もよく似通っている。棺材は梓や桐、特に杉や桧などの樹木が多く利用され、大部分は寝棺で長さ八尺、幅三―四尺、高さ三尺内外、厚さ七寸位の板で、内部は円高に削つてある。金銭的にも良いものになると百万円単位、安価なものでも日本などでは及びもつかぬ金額である。(もつともこれは土葬向のもので火葬に用いられる棺は日本の場合に準ずるようである。)マレイシアの回教地域では棺そのものには重きを置かず、一つの棺を死者が出ると何回でも用いる。印度やネパールなどでは一般に棺を用いず、布を以つて屍を包み、薪の上で荼毘をすところが多い。欧州においては棺の材料は榆(ひんぎ)や柏(ひんぎ)などを用いていると言うから、特定の香木類などの如き貴樹を除き、その地域の生産を主眼とした木材が多く選ばれているように考えられる。

棺の材料の如何は屍に対する周囲の人たの思いやりの度合が信仰上の観点に大きな影響のある事は察せられるところであるが、更に、棺の内部に対する故人の安置の方法や副葬品などについても大きな感心が寄せられる。納棺するに当り普通棺中に入れる品物について二つの事柄が考えられる。一つ

は運般中に屍体が揺れて破損せぬように固定すること、二つは、無事にあの世へ送り出すための処法である。日本では棺中の屍体を固定する場合、古来、貴人は朱、中流においては炭や茶、抹香などを用いるのが常であつた。一般の人たちは藁をつめるのが通例で、粗穀を用いるところも広範囲に行われた。この場合、白布を袋に細長く縫い合わせその中につめて屍体の両側に並べたのであつた。北京の周辺では鋸屑(おが屑)が多く用いられたが、屍体を茶毘せず長く寺院に預けたり保存をする場合、または、棺を遠方に送る時などには鋸屑の代りに石灰をつめたとも言われている。私が台北の近郊で納棺の折に臨んだ時は、棺の底に金銭(おかね)を印刷した紙が幾重にも厚く敷かれ、その中に句まれるように屍体が横たえられていた。

現在でも水取紙や水取布の類を入れるところもある。時に、お茶や炭なども入れられているが、茶や炭は湿気を除くと共に悪臭を吸収する性質があるので重宝されていたのである。棺の隙間をなくすために布団をつめるところもある。時には同様な役割をもつ炭の代りに穀物を焼いた灰を入れる場合もあつた。デ・ホロートによれば、『厦門人の言葉では棺を死者の家に運ぶ苦力を脚夫・工脚と呼ぶ。…通例その頭目は納棺に際し「大きな役割を演ずる。先ず第一に、家人が近隣から集めて置いた灰を棺の底に徐々に撒布しながら大声で言う。「焔火灰、与汝之团孫富錢幾阿堆」(汝の子や孫に富の山を

得させんために灰を撒く)すると其の場にいる者一同が声を揃えて大声で叫ぶ、「好阿好阿」(よしよし承知した)と言う意味の強い肯定である。中国では灰は家庭の福祉の象徴となつてゐるが、火が燃え食物が調理されている家庭は貧因の筈がないと言うのである。』と。韓国の場合においても同様、湿気と腐故を防ぐために蜃灰(石灰)を棺内へ特に死者との血縁の強い者四人が屍体を持ち上げてつめると言う。棺の隙間には白紙で銭形をつくつた紙銭……つむぎやどんす・わら……などをつめ込んで充たすとされている。

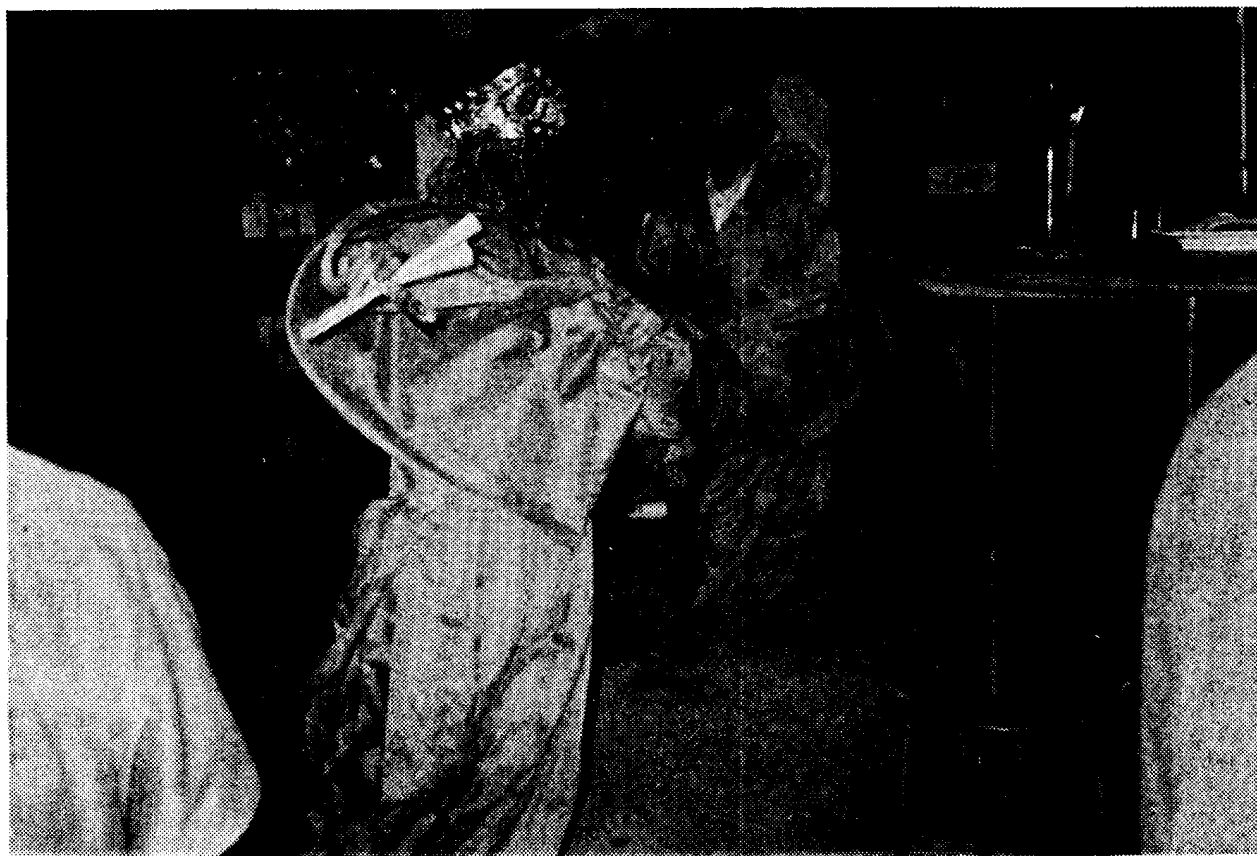
第二に棺中に入れられるものは死者の旅用に供される品物である。日本では古来より死者の足には脚絆や草履を着け、手には珠数を持たせ合掌の姿をさせた。死者の両脇か頭陀袋の中には血脈や経本・護符、その他、米・銭・笠・杖・櫛・握り飯・自己の生前に抜け落ちた歯や近親縁者の瓜や髪などが入れられた。台湾などの場合も日本と殆んど同様なものが棺中に納められるが、血脈は見られない。しかし昔日においては、僧より納棺の際に黄色紙による梵字を書いた死者の冥福を祖る所の呪文を受けたと言うから、血脈に類したものは存在したのかも知れない。ただ特記すべきは納棺の時に止むおえず三日以上置く場合は、衛生紙・ソラ紙・お茶などを多く入れる。普通、それに鏡一個・センス一本・サイフ一個・ハンカチ一枚・小柳の葉ひときれなどを入れる必要があつた。

小柳の葉は地獄に行った時、犬が追いかけてくるので杖の代りに持つのだと言う。所によっては、小柳の葉の代りに箸を一对入れてやり、これを棍棒の代りに使用して犬の噛みつくのを防ぐ場合もあると言う。中国南部の地方から台湾では、小柳の枝に代つて桃の木を枝を入れるところもある。これも死者があゝの世に行く途中の道程が非常に遠く、犬に吠えられる場合があるので、その時に桃の枝をもつて追い払うのに役立つためと言われている。元来桃は鬼をはじめとして魔物を退散させるために大きな力を持っていると考えられていたのである。我が国でも古来斯かる思想は強く、古事記中の桃をもつて鬼を追い払うの段や桃太郎の説話伝説などによつても広く知られるところである。また、若い夫婦の入棺に當つて、屍体の脇に石を入れることもあつた。石がなくなるまで夫婦の間柄が続くようにとの親心からであり、更には、石が腐るまで死者が子供やその子孫たちと会う事がないと言う意からとも言われている。時に棺の中へゆで卵を入れる事もあつた。ゆでた卵は孵化をしないと云う事に通じているのである。これは死者霊の再来を避ける(この世に生き返つてくることが恐れる)ための考えより生じたものであり、同様、「豆鼓苞」と言つて、醬油麴を棺中に入れる風習もあつた。若しもこのモロミが発芽して育つたならば、もう一度この世に生きかえつて子孫に会いましょうと言ふ意味で霊の再来を

恐れた内容である。現在、の年寄の中に、このような風習の行われていた事を知っている人も少なくない。その他、愛酒家ならば酒の小びんを、愛煙家ならば幾何かの煙草を、学者ならば書物や筆などを、子供たちならば、愛好した玩具類を入れてやる。以上の品物が棺中に納められると共に道士、または僧侶によって納棺の儀が行われる。これを「収シツク烏」と呼んでいる。

台湾の場合その多くの葬送儀式は道士か僧侶によって行われるのが通例である。道士による葬式は打楽器、笛、ラッパ、胡弓などを使用したニギヤカな元氣のよい、調子によって進められる。仏僧による葬式は静寂のうちに進められて行くので道士の場合とまったく変わった趣おもむきで感じられる。人によってとり方は色々であるうが田舎部の人たちには道士によるニギヤカな葬式が好まれるのか、それとも伝統的な面が強調されているのが、道士による葬式が多く、都会部の人たちは静かさを欲するインテリーの存在が多いためか、僧侶による葬式を望む声が高い。葬式の日時は結婚式の日時と同様に風水師(折日師)によって吉日を選んで決定されるが、この考え方は昔ながらに今尚継承せられている地方が多い。

擇日師の指図に従い、いよいよ葬式の日時が近づくと正庁より棺を庭先に出して安置する。選定の時刻が夜中に当る時は棺を少し移動させてその意に応じ翌日外に出すことにす



台北郊外の葬式にて道士打楽器に合わせて舞踊る。

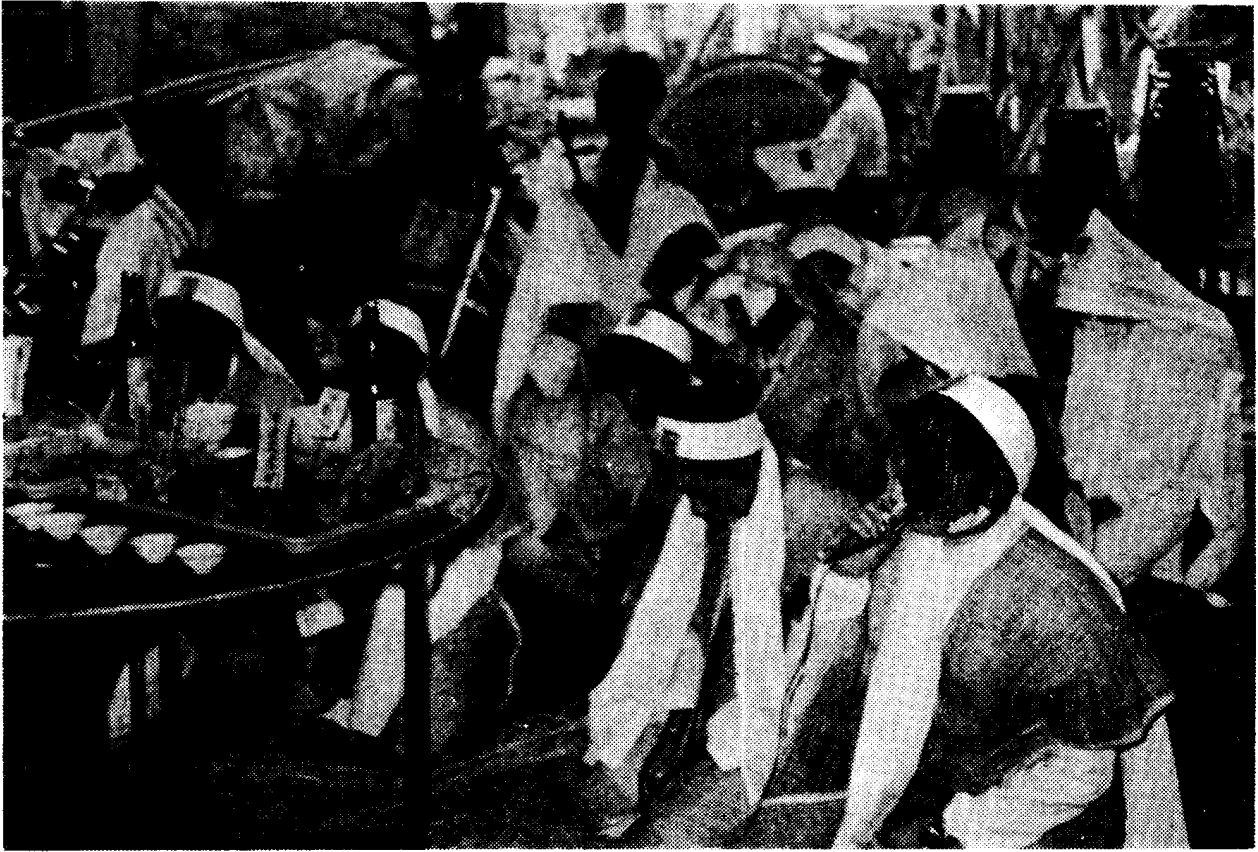
る。「起柴頭」と言つて他家に嫁いた死者の子孫の家(母方)から牲醴を贈ってくる。

この時の姿は粗い黄の喪衣を身につけ徐に訪問してくるのである。棺の前には卓を並べ、その上には遺族や外戚より届けられた五牲などの供物が供えられている。八牲とは五種の供え物を意味し、五枚の大皿に豚の頭・鳥・家鴨・魚・豚の臍物などを盛ったものである。最前部の卓上にはローソクを点じ香を焚き、はじめに孝男(喪主)が母方の使者に対して三跪九拝し、続いて他の遺族たちも跪拝する。―中国においては母方の親戚は非常に大きな力をもっているが、台湾においても同様な仕来りが残っている。―そののち葬式は僧侶や道士によって営まれるが、読経が終れば「封釘」となる。日本的に言えば棺に釘を打つ儀式である。棺の四つ角に釘を打つのであるが、昔地方によっては鉄の釘を打つのを嫌って木の釘が打つたところもある。釘を打つ時には「この釘を打てば長生きができる」とか、「金銭がたまるとか、「幸福が訪ずれる。」などと縁起のよい言葉を投げかけながら打つのが通例である。時には安堵の言葉が投げかけられた。つまり、遺族や親の入った棺に向い「われわれはただ棺に釘を打つだけですから、恐れなくて下さい。」と。

死者が母である場合は外戚の人が打ち、父の場合は同姓の人、または、同輩の人を頼んで打ってもらうと良いとされて



台中郊外の道士による葬式にて、(子孫釘)喪主は子孫繁栄のために、最後の釘を口にて噛み引抜いている。



台中における道士の葬式。葬送の日、お別れに当り婦人遺族  
たちは死者(父親)に向って交互に訴える。



台中における道士の葬式。最後の別れに喪主は這いずりながら  
犬のように歩く

いる。喪主は最後に軽く打たれた釘一本を(子孫釘)口にて抜き取り、同時に棺の一部を削り取って香爐の中に入れ、喪明けまで保存して後に投げ捨てるのである。「子孫釘」の名称はもともと中国大際よりの名残りであり、陽子江の下流一帯にもその風習があったと言う。

井出孝和太氏は「納棺の折、死者の頭から三本の毛を抜き取り、それを棺の蓋を閉じるために用意した三本の大釘に結ぶ。之を鑿釘、または、転釘と言う。」と述べ、その音が晩丁、または、伝丁に通ずるので子孫繁昌の印しるしとすると、その理由を説明されている。棺に釘が打ち終ると鑿鉢を鳴らしながら、道士先導のもとに孝男(喪主)を連れて棺の周囲を三回廻る。この時孝婦は棺に寄り添って号泣するのである。

日本においても出棺の際三匝の風習を見かけるが、これは印度に端を發したものであり、共通性がしのばれる。葬送儀礼の最中、近親の娘たちを中心に死者との会話が哀れ悲痛なる口調をもって行われる。「あなたはなぜ私たちを残して行ってしまったのですか!!」「私はくやしい!!」これを聞いた周囲の人たちは貰い泣きして号泣のうつぶとなる。このような状況にいた孝男(喪主)は大地に礼拝し、そのまま四つん這いになってすばやく道路に進み、家人と共に泣き悲しむ。私はこの姿を台中在の道士の葬式現場にて見る事が出来た。その間それに合わせる如く、楽士たちの奏せる音楽がなりし

きった。

#### 四

葬送に参加する人たちは死者との遠近の關係により、それぞれ異なったところの喪衣を着用する。近い間柄ほど麻織の粗あらいものを、遠くなるに従って細かいものを着用するのが常である。また、喪衣につけた布の色彩やその長短などによっても故人との關係を知る事が出来る。台湾で聞いたところによると、麻でつくったものと苧麻ちよまでつくったものがあり、孫とか甥とか姪の場合には苧麻、娘の婿、死者の同輩は白い布、里内の者は白地の中に赤い筋のもの、遺族でなく傍系の者、つまり、兄さんの婿とか弟の婿などの場合はまた區別があると言う。死者が年令をとっており、孫の玄孫ひいじいさん、または、同輩などの場合には青い色か黄色の色を付けて區別をする。

更に正五代せいごだいと言って家に三人のおじいさん、三人のおばあさんがあった場合、非常に幸福だと言って皆んな赤いもの(赤製の布)を着用する。(普通は白いものを用いる、)提灯・ローソク、皆赤いものを用い、正五代と言って寿命の長い事をお互に喜び合うのである。その五代の孫も葬式の際には赤い着物を着ることになっている。台湾では第一代が赤、第二代が苧麻、第三代が青、第四代が黄色、第五代が赤になっている。白い帽子の上に赤いしるしをつけたり、青いしるしをつ



台湾淡水での初七日の法要、左側が短いのは父親が死亡、右側の短いのは母親が死亡、両方同じ長さはすでに両者死亡

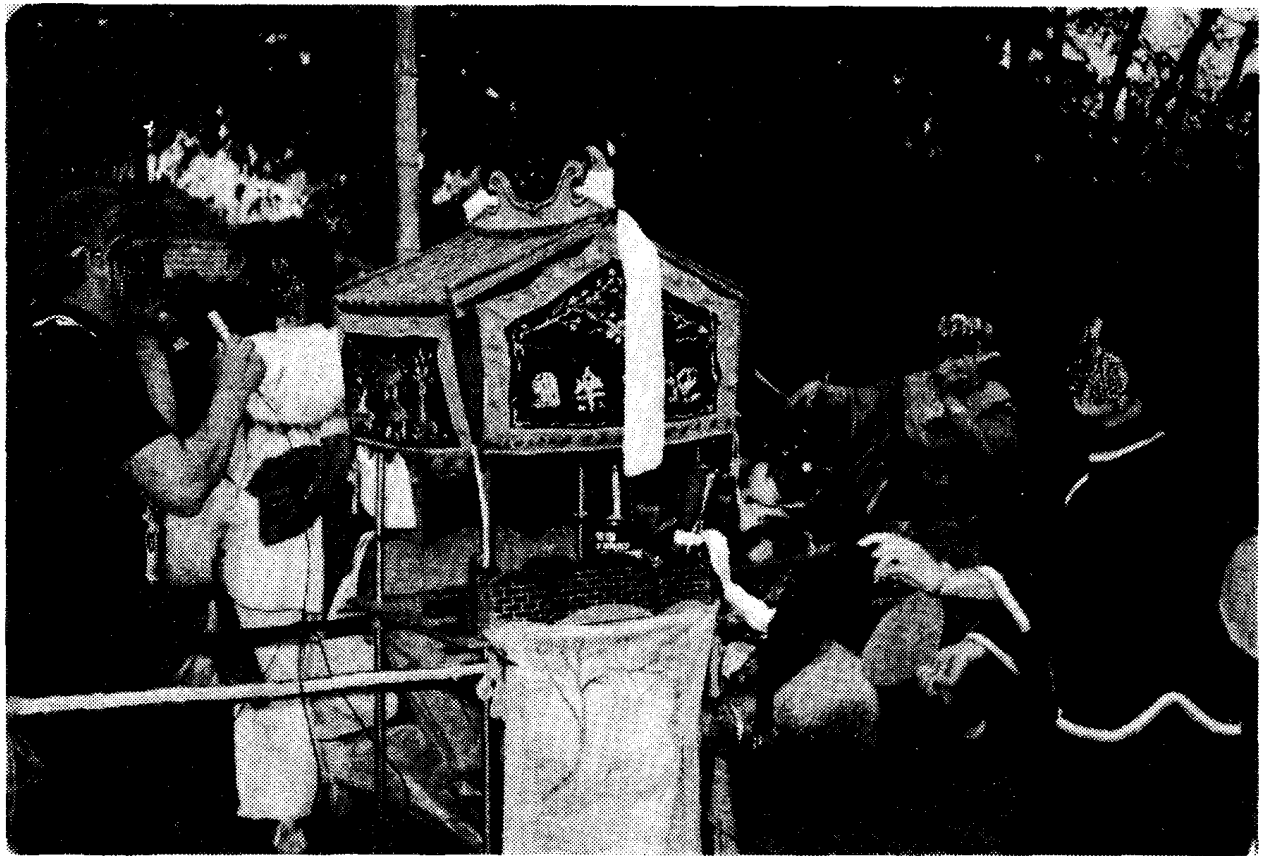
けたりするが皆それぞれの意味がある。また、喪衣の帽子の裏側の長短によっても死者の内分けを知る事ができる。つまり、左側の布が短い場合は父親の死亡した事を示し、右側の布が短い場合は母親の死亡した事を示している。両者同じならば両方が亡くなっている場合、(前に父親または母親が死亡しており、今度は母親または父親が死亡したと言うような場合)を示している。

#### 四

台湾では道士を職業人と見ている者が多い。道士は功德のために色々な法要儀礼を営むが一般的にニギヤカな雰囲気や醸し出す。それに対し仏僧の場合はひたすら念仏を行うのみで静かである。世間一般では言う。台東付近での道仏の比は半々だと言われる。葬式は仏教では電気オルガンなどを用いて静かに行なわれ、法要時の僧侶の数は一・三・五などの奇数で行われるのが常である。道士の場合は昔の観念、仕来りが強い。葬式などで道士を必要とする場合、一人に頼めば何時でも同業者を何人でも連れて来てくれる。彼等の一部の人たちを除いては寺院のような建物を持たず、普通の家に居住している。道士の家の門には「清月檀」とか「金剛檀」とか、檀の文字を付けた札が掛けられているので直ぐにわかる。時折街角でこのような看板を見かけることがあれば、こ



これは道士の家と見てよい。世間では一般的に僧侶の方が道士より尊敬されている。大体葬式の時仏僧による場合は三名か五名位で営むが、道士による場合は一名乃至三名位の数が多く、その近くで若い踊り子たちがドンヂャンとニギヤカに踊っている場合がある。高雄のホールで「葬送の舞」と言う踊りを見た。その時には、このような曲が：と言う程度で何にも気にせずにごまかしていたが、台中の郊外での道士による葬式の際、踊っていた舞姫の姿を見て新らたな目で道教の葬送習俗を見なおした。(台湾に伝わっている一般の仏教は道教との混交が多い) 踊り子たちは煌びやかな衣服を纏嬉し(まとい)ような表情で踊り歌うのである。時には葬列に参加しながら踊る事もある。踊りの内容は参列の客に興味を与えるものであり、葬式を盛大にするのが目的らしい。必ずしなければならぬと言うことではない。親戚の者や他家に嫁いだ娘たちが葬式や法要がさびしくては困るので特に備うのである。道士による葬式の場合は統経の間に色々笑わせたり芝居のような事をする。これは葬式の場合のみでなく、五つ七日(いつなのか)、四十九日、一周忌、三回忌などの時にも同様に行はれる。時に軽業を備うところもある。二―三名の人たちが傘を廻したり、松明(たいまつ)を手玉にしたり、一輪車に乗ったりして芸を競い合う。四―五千円の礼金を出すと言う。葬式や法要の時に何故、軽業などのような事をしなければならぬか、「これは道教(道士による葬



台中の葬式(道士による)で葬送の舞をする乙女たち



道教による葬式は実にニギヤカである。道士の甲高い声に合わせて旧式のラッパ・ドラ・大ダイコ・小ダイコ・ニヨーハチ・コキユウなどがけたたましく鳴り響く。周囲には地獄、極楽の絵図、仏教譚を画いた布が貼られ、実に印象深いものがある。



台中における道士の葬式、葬式のひとときを供養の名で奏芸する軽業師の熱演ぶり。百ケ日・一周忌などの場合にも行われる

式)の場合、一つの行事となっているからである。ただし、必ずしなればならぬと言う事ではないらしい。昔葬式の時に皆恐ろしがって来なかつたので、軽業などをする事により人を集めたのだと言う。元来中国の人たちは、人の集まる事を大変喜ぶと言われるが、言わば葬式を盛大にするための手段であつたのかも知れない。先の踊り子たちの場合と同様に、台東などでは、嫁いた娘たちや、故人と特に親しかった深い関係のある人たちが寄付することになっている。

台湾では昔日道士による葬式が多かつたせいか法名などは殆んどつけられていない。引導を渡す例もあまり聞かない。あつても極く少ないと言う。墓石を見ると時に諡おくりなのついているものを見かける事がある。最近では法名をつけてもらう人もある。仏教が広まるにつれて法名をつけるようになったのである。法名は大部分が二字である。(日本でも鎌倉・室町時代初期の法名は二字であつた。)在世中に仏法に帰依した人は内号と外号の四字をもっている人もある。僧侶の場合は四字が多い。在家の人で居士をつけてもらっている人もあるが人数的にはごく少ない。

参考・引用文献

- (1) デ・ホロート「中国宗教制度(Ⅰ)」昭和二十一年八月、大雅堂発行、清水・荻野目録、八十一頁。  
 (2) 鈴木清一郎「台湾の冠婚葬祭」昭和九年十二月、台湾日日新

報社発行、二二二頁。

- (3) 堀田吉雄「日本民俗学二十二号中」二九三頁。

- (4) 和田謙寿「仏教の地域発展」昭和五十三年三月、仏教民俗研究会発行、三四九頁。

- (5) 鈴木清一郎「台湾の冠婚葬祭」昭和昭和九年十二月、台湾日日新報社発行、五十四頁。

- (6) 龔天民「仏教と民俗六」昭和三十五年五月、仏教民俗学会発行、三十九頁。

- (7) デ・ホロート「中国宗教制度(Ⅰ)」昭和二十一年八月、大雅堂発行、七十一―七十一頁。

- (8) 秋田成明訳「支那歴代風俗事物考」昭和十八年、大雅堂発行三四二頁。

- (9) 内田道夫「北京風俗図譜(Ⅰ)」昭和三十九年七月、平凡社発行、九十頁。

- (10) 龔天民「仏教と民俗六」昭和三十五年五月、仏教民俗学会発行、三十九頁。

- (11) 韓東亀「韓国の冠婚葬祭」昭和四十八年三月、国書刊行会発行、二九三頁。

- (12) 和田謙寿「仏教の地域発展」昭和五十三年三月、仏教民俗研究会発行、二九七頁。

- (13) 内田道夫「北京風俗図譜(Ⅰ)」昭和三十九年七月、平凡社発行、九十頁。

- (14) デ・ホロート「中国宗教制度(Ⅰ)」昭和二十一年八月、大雅堂発行、八十三頁。

- (15) 韓東亀「韓国の冠婚葬祭」昭和四十八年三月、国書刊行会発

行、二九五頁。

(16) 和田謙寿「仏教の地域発展」昭和五十三年三月、仏教民俗研究会発行、二九三頁。

(17) 鎌木清一郎「台湾の冠婚葬祭」昭和九年十二月、台湾日日新報社発行、二三七頁。

(18) 和田謙寿「仏教の地域発展」昭和五十三年三月、仏教民俗研究会発行、二四四頁。